



こども食堂 北海道ネットワーク 通信

ニュースは連日、ロシアによるウクライナ侵攻を伝えていて、気持ちの落ち着かない日々が続いています。その影でコロナは小さな子どもや若い人の間で広がりを見せたまま、もうじき早くも6月、一年の半分か過ぎようとしています。みなさまにはお変わりはありませんか？

子ども未来局オンライン説明会

【補助事業説明会を行いました】

4/11(月)、札幌市内でこども食堂など子どもの居場所づくり活動について取り組む団体に対して、活動にかかる経費の一部を補助する事業の説明会を、札幌市子ども未来局と共同してオンラインで行いました。参加人数は運営者さん22名、未来局より2名、事務局から3名でした。内容は、令和4年度札幌市「子ども食堂活動支援」「子どもの見守り強化事業」の二つに関して、子ども育成部の越後武介様よりご説明頂きました。後者は、昨年より実施された事業ですが、子ども達を一人一人見つめ、団体メンバーや行政機関と連携して見守っていく形として、更に、事業を運営する費用の捻出に関しても注目されています。この厚生労働省による「支援対象児童等見守り強化事業」へは、道内では札幌市のみが手を挙げて実施している状況のようです。(endo)

「かほ亭」さんをお訪ねしました。

4月19日(火)に豊平区月寒東4条18丁目にある「地域食堂かほ亭」さんを見学させていただきました。周りはずっと瀟洒な一戸建てが続く静かな住宅街、街路樹が立ち並ぶ素敵な町です。目印は赤いサイロです、と代表の井上寿枝さんにお聞きしていましたが、この大きなサイロの付いた建物が地域食堂の開催場所、東月寒白樺会館でした。今回、かほ亭さんにお話をお聞きしたいと思ったきっかけは、昨年10月に開かれた「豊平区・清田区合同交流会」でのお話でした。

それまで、各交流会では参加運営者さんたちの間で「困窮の子どもたちに出会っているのか？どうしたら子ども食堂



(井上さん・左 と難波さん 食材配りなのでスタッフはお二人です)

に来てくれるのか？」という話がずっと出ていたのですが、この時、井上さんがいとも簡単に「そういう子も来ていますよ」とおっしゃったのです。どうやって？という質問に「誰かが連れて来てくれるんです、紹介です」と答えられ、私はもっと詳しく井上さんのお話を伺いたいと思ったのです。

かほ亭さんは「NPO法人つなぐ」の事業の一つで、法人の始まりは共同学童保育所を卒所した子どもたちが安心して過ごせる放課後の場を考える中で、1996年に作られた「つばさ応援団」でした。その後、2004年にNPO法人となり、2012年に法人名を「つなぐ」に改名、障がい福祉サービスや地域交流事業を行うほか、2014年地域活動支援センター「なんもさ」を開所、さらに2017年9月に「地域食堂かほ亭」をスタートと、順調に地域に居場所を広げて来た歴史のある団体なのでした。「子ども食堂」という名称より、「地域食堂」としたのは、子どもはもちろん、その家族や地域の大人も大歓迎！「かほ亭に来るとなんかホッとする」そんなふうにもってもらえる地域の居場所作りを目的としたからだと思います。「経済的貧困」もありますが、「関係性の貧困」が

広がっているのが今だと思うんですと井上さんはおっしゃいました。開催は毎月第三火曜日、コロナ禍に入ってから5時から6時半まで、子どものみ限定30食。この日はコロナ陽性者が多いので食堂形式を諦め、予約をしてくれた30人の方に、あちこちからの寄付で集まった食材を袋詰めにして配る日でした。去年はコロナが引かない中でも6回、



(人が集う地域のシンボル、赤いサイロ。屋根の形も素敵です。)

食堂を開かれました。少しでも食堂形式での開催を可能にするため、市が発表する陽性者数を参考にするほか、地域の小学校などでどのくらいコロナが流行っているのかを参考にしているそうです。この白樺会館の前には大きな掲示板があり、毎回、法人会員さんが手書きで今月のかば亭情報、〇月は食材配りの月です等、と案内を書いて下さるそうです。また、町内会連合会が3月に発行した「東月寒だより」にかば亭の紹介記事を掲載してもらったことが井上さんはとても嬉しく、地域の力を借りて活動しています、と語られました。「何か、お困りのことは？ネットワークに期待することは？」とお聞きしましたら、「困っているのはコロナです、一日も早く元の状態に戻って、食堂を開き、以前のように100人くらいの方々に集まっていただきたいです。ネットワークにはいつも感謝しています。いろいろな情報を頂けたり、さまざまなものを頂けるのも有難いです。ただもっと横のつながりがほしいというか、気軽な交流の場、というのはコロナ禍では無理なのではないでしょうか、たとえばメルアドの公開などは？」と話されました。お話を伺う中で、なぜかば亭さんには困難な状況にある子どもが来られるのか、食堂を始めてすぐにお客が180人も集まった、ということの理由がわかったように思いました。30年近い地域作りの歴史があつての賜物なのだと思います。

私自身の子ども食堂も一年でも長く継続させなくては、と強く思いました。

子ども未来局

佐賀あきこさまからのお手紙

みなさん、こんにちは。

私は、平成31年から昨年度末まで札幌市職員として、子ども食堂関係のお仕事をしておりました。交流会に参加させていただいたり、補助金関係の手続き等で皆様とやりとりさせていただいていました。

子ども食堂関係の仕事を担当するまで、「子ども食堂」は、私の生活とは全く関わりのない存在であり、実際には見たことも触れたこともないものでした。どんな方たちが何のために活動しているのかということについても想像したことすらありませんでした。

子ども食堂の担当になってもしばらくの間は、やはり、そこまで強く興味を持ってなかったのです。むしろ、本当に困っている子どもたちは、子ども食堂にすら行けないのではないかと、どこまで困ってもいいのに利用してる人も多いのではないかとなどと考え、どうして子ども食堂がこんなに世間で騒がれているのか、理解できなかったのです。

さて、そんな私でしたが、この3年の間に、自身の子ども食堂に関する認識は大きく変わりました。

札幌市内には現在約80数箇所の子どもの食堂がありますが、どの子ども食堂もそれぞれに強い個性があり、提供しているものもやり方も、開催の方法も頻度も、参加者も、何を目的としているのかも、全て違っていきます。運営者さんと参加者、地域の方々の融合で化学反応



(佐賀さん、お世話になりました、有難うございました。)

が起きて、個々のクセが、臭いが、雰囲気生まれてきているように私には思っています。

子ども食堂に対して、何らかの画一的な認識を持つこと自体が少し違うのではないかと、今の私は思っています。子ども食堂の自由度が大きいからこそ、子どもたちは自分にフィットする場所を選択できますし、参加者が自分たちの色を混ぜ合わせ、自分たちの居心地のよい居場所をそれぞれ

れで生み出していくことができるのだらうと思っており、皆様の活動の今後の展開に期待しているところです。

私は、この3月で札幌市の仕事から離れますが、子ども食堂、子どもの居場所が今後どのように広がり、展開していくかについては、興味を持ち続けていくと思います。

至らない点多かったとは思いますが、いつも温かくご対応いただき、本当にありがとうございました。

(佐賀様は4月1日より、北海道職員に転身され、現場がお好きとのことで、子どもに関わるお仕事に就かれました。今後さまざまな情報をお寄せいただく機会があるかも知れません。その節はよろしくお願ひしたいと思います。)

事務局から

コロナ禍が始まってから2年以上が過ぎましたがネットワークは2020年3月末 45 団体・2021 年3月末 72 団体・そして2022年3月末 104 団体とコロナ禍の下で連携と交流を深める思いを反映し大きく成長してきております。コロナ禍で食堂開催を自粛しているところもあると思いますが、お弁当配布、またはネットワークへ届けられたJAさんからのお米や多方面からのお菓子等の寄付品を配られるなど、およそ8割が活動を続けて来られています。

公的機関の援助がない中、個人で立ち上げた、あるいは地域の方々、仲間同士で立ち上げを決めたという現場の力には、心から敬意を抱かずにはいられません。みなさん、ほんとスゴイ！！です。これからも子ども食堂を増やしていくための新規立ち上げ資金の必要性は、昨年度、ネットワーク事務局も札幌市に対し、提案していた事項です。コロナで行政の職員が対面できない状況が続き、危機感を持った自治体が子ども食堂に注目、その動きに呼応するように2021年4月に厚労省が「子どもの見守り強化アクションプラン」を発表、連携先として子ども食堂と子ども宅食が明記されました。6月の二次補正予算で予算化されましたが、厚労省が予算化した政策に民間の草の根運動だった「子ども食堂」が明記されるのは初めてのことでした。これまでの間、各地では災害のたびに子ども食堂が増える、という一面はありま

したが、コロナと云う全国的災害に国も自治体も動いたといえると思います。

食堂形式にして、みんなで交流するという機会は失われましたが、お弁当配布にしてから、逆に来られる方々と運営者さんが会話する機会が増えた、ひとりで子どもとじっと家で怯えながら過ごしていた、という方から、子ども食堂には灯台の灯りがともっているように見えた、という声があったこともあります。コロナ禍の始まりの頃は、得体の知れなさが恐怖をあおったということもあったでしょう。ウクチンをみなさんが打つようになり、この先、治療薬が一般に出回るようになれば、以前の生活に近い生活に戻ることでしょう。

今回、佐賀さんがお書き下さっているように、子ども食堂の形はいろいろあり、乳幼児から高齢世代までが集う地域の居場所作りを目指しているところや、困窮の子どもたちに心を寄せたいと思っている運営者さんもうらっしゃいます。基本的にはそれぞれの子供食堂は独立した団体ですが、お弁当配布にしたら、予算したものが高上りとなり、資金不足に陥ったという問題も起きているようです。どこも助けてくれない、孤立無援だ・・・とため息をつかれる運営者さんもおありかも知れません。ウクライナ侵攻によりインフレーションの懸念もあります。そんな中、今年度はさらにこの現実を踏まえ、ネットワークの力を高めたいと考えております。そこで、今年度は二か月に一度開かれる「NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ」との情報交換・交流会へみなさんのお考えを反映させるべく、ぜひご意見をいただきたいと思います。その内容は逐次、発信していきたいと思ひます。

【Zoom 利用について】

先の記事にもありますように、オンラインツールの Zoom を利用して開催する取り組みは、基本的には対面式の交流会・勉強会を大事にしながらも、コロナ状況に依り、今後企画して居ります。開催のお知らせは、主としてメールにて配信する予定です。まだメールアドレスのご登録のない団体様は、ご連絡くださいます様、宜しくお願ひ致します。(endo)

編集・飯田 澄子

こども食堂
北海道ネットワーク

F 003-0303
北海道札幌市白石区菊水三条4丁目1-3
こくみん共済COOP北海道会館4階
☎ 011-841-8601
<https://ks-hokkaido.net>
info@ks-hokkaido.net